The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	十字架の道 : ポール・クローデル作
Author(s)	中山, 篤子
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 198-214
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

十字架の道

ポール・クローデル作

中山篤子

第一留

終った．われらは神を裁き，死刑を宣告した．

もう望まぬ，われらと共にイエス・キリストを．彼は邪魔だ．

セザルのほかにもはや王なし，血と黄金(こがね)のほかの掟もない．

十字架につけろ，お前らがそうしたいなら，さあやっつけろ，連れてゆくんだ！

やってしまえ，畜生！そうしなきゃならんから犠牲にするんだ，われらにはバラッバを与えよ！

ピラトはガバッタと呼ばれるところに座をしめる．

「言うことはないのか」とピラト，だがイエスは答えない．

「――この男にどんな罪も認めぬ」とピラトは言う．「何だと，　それほどに望むなら殺すもいい．お前らに与える．さあ見よこの人を！」

頭(かしら)には茨の冠を，背には緋衣(ごろも)を着けられたキリスト．

これをかぎりとわれらに向うそのおん眼に，涙と血があふれる．

どうすればいいんだ，もうこの上われらにひきとめるすべはない．

彼はユダヤ人に躓きであったように，われらには無意味(ナンセンス)なのだ．

それに判決文も下りた，ヘブル語，ギリシャ語，ラテン語で，何一つ不足は

ない.

叫び立てる群衆，手を洗う[1] 裁判官が見える.

第 二 留

キリストに着物をまとわせ，十字架が運び込まれる.

イエスは言う，「よくきた，長く待ち望んだ十字架よ！」と.

さあお前，キリスト教徒よ，眺めるがいい，身震うがいい．ああ何と荘厳な瞬間.

キリストが始めて永遠の十字架を受けられるそのとき.

ああ楽園の樹[2] のこの日の成就よ.

罪人よ見つめよ，お前の罪が何に役立ったかを見よ.

もはやこの樹に神のない罪なく，キリストのない十字架[3] もない.

まさしく人間の不幸は大きい，だがわれらに言うべき何があろう.

神はいまやこの樹にあり，解き明さず，成し就げにこられたからは.

イエスは十字架を受ける，われらが聖体[4] を受けるごとくに.

「われらはそのパンの代りに木を与える」，予言者エレミアによって言われたごとくに.

ああ十字架は何と長い，何と巨大で，難儀なものか.

何とそれは荒っぽい，何と固い，何と重いのだ，無駄な罪人の重みである.

その上で死ぬまで一足一足担うことの何という遠さ.

あなたはただひとりそれを担い行かれるのですか，主イエスよ.

今度は私に忍ばせて下さい，お望みのままに私(わたし)が背負うその木を.

十字架がわれらを担うより先に，われらが十字架を担うべきならば.

第 三 留

進め！犠牲者と死刑執行人は同時に，ものみながカルワリオの丘に向い動き出す.

首をひかれた神は俄かによろめき，地に倒れる．
この始めての顚倒に，主よどんなお気持でしょうか．
そして今やお知りになって，あなたは何とお思いになります，倒れ，
よく担われていない重荷に投げ出されるその瞬間を．
どうお感じになります，あなたが創られたこの大地を．
ああでこぼこなのは善への道ばかりではない．
悪への道もまた裏切りの目も眩む道である．
そこへ真直ぐに行くのではない，石から石へと身に泌みて覚えねばならぬ．
そして屢々足をとられる，たとえ心は耐え忍んでも．
ああ主よお救い下さい，聖(とおと)いおん膝，一度にあなたが失われたその諸(もう)膝によって，
突然おそう吐気，ひどい道にさしかかっての顚倒によって，
うまくかかった落し穴，思い知られた地面によって，
はからずも犯す始めての罪からお救い下さい．

第　四　留

ああ初子(ういご)[5] にしてひとり子の死を見た母たちよ，
あの夜(よ)，呻き苦しむ幼な子に付き添った最後の夜を思い出すがよい．
飲まそうとする水，氷，体温計，
そして刻々と歩みよる死，もはや無視しえぬ死．
彼にその貧しい靴をはかせ，下着と胴着をとりかえよ．
だれかがやってくる，私から彼を奪い地に埋めようと．
わがいとし子よさらば，ああわが肉の肉よさらば！
第四留，それはすべてをうけがうマリアである．
ここ道角(かど)に，限りなき貧しさの宝キリストを待つマリア．
その眼にいささかの涙なく，その口に唾気(しめり)なく．
彼女は言葉なく，辿り着くイエスを見つめる．
彼女はうけがう．今一度彼女はうけがう．叫びは，

雄々しくも凛々しい心のうちにきびしく押しとどめられる.
彼女は言葉なく，イエス・キリストを見つめる.
母はその子を，教会[6] はその贖い主を見つめる.
その魂，死にゆく兵士の叫びのごとく，激しくキリストに向う.
彼女は神のみまえに立ち，魂を開(あ)け，神の読みたもうままに捧げる.
その心に，拒み，退くもののなく，
さしぬかれた心には受け入れず同意せぬ思いなし.
ここに在(いま)す神自らのごとく，彼女もまたここに在る.
彼女はうけがい，胎に宿したおん子を見つめる.
言葉なく，聖人(ひじり)らの聖人なるキリストを見つめる.

第 五 留

もはやことはうまくゆかず，前進のかなわぬ時がくる.
われらが，もののつなぎ目を見出すのも，腕づくで，
あなたの十字架に使われることを許されるのも，まさにこの時.
あの木の端に繋がれたシレネのシモンのごとく.
彼はしっかりと把み，イエスのみあとを歩む，
十字架のわずかをも引きずらず，なくさぬようにと.

第 六 留

弟子たちみなは逃げ，ペトロ自身狂ったように否んでいる.
嘲りのよどみのうち，死の思いのさ中にあるひとりの婦人，
身を捨ててイエスを見出し，両手にみ顔を頂く.
教えて下さいヴェロニカ，世の思惑(おもわく)をものともしないことを.
世間ではイエス・キリストはただ心像(イメージ)にすぎず，実に，
そうでない人々にも忽ち不愉快，うろんなものとなるのですから.
キリストの人生設計はあべこべ，その動機はもはや世間のものではない.

そこには常に捉えられぬ何か，よそものの何かがある．
ロザリオを唱え，恥しらずにも懺悔に行き，
金曜日には肉をひかえ，ミサでは女たちのうちに見かける大の男，
それは笑いもの，憤慨させる，奇妙だし，焦立たしいのだ．
行いには気をつけるように，人は目をつけているから．
歩みの一つにも気をつけるように，彼は一つの印(しるし)であるから．
キリスト者はみな不肖なりとも，わがキリストのまことの像(すがた)．
そしてその表わす顔は，心に抱く恐ろしくなお輝かしい神のみ面(おもて)の卑しい映(うつし)．
今一度見せて下さいヴェロニカ，
あなたが布の上に頂いた臨終の聖(み)顔を．
おん血と涙とわれらの唾気(つばき)で作られた
そのみ姿が，永遠について離れないようにと，
酩酊の日のぶどう刈り入れ人(びと)の面を[7]，
ヴェロニカがここに秘めた敬うべき亜麻布！

第七留

足もとの石ではない，余りに強くひかれた首綱(くびづな)でもない，
突如失われたもの，それは魂．
ああ人生の半ばで！自らなす顛倒．
磁石はもはや極をもたず，信仰は蒼穹を失うとき，
道は長く，行先は遠いゆえ，
ただひとり，慰めとてないゆえに．
時の長さよ！無理強いの命令と
この木の道連れに増しゆく秘かな嫌悪．
それゆえ，泳ぐ人のように一度に両腕を差し出す．
倒れるのはもはや諸膝からではない，頭からだ．
まさに体(からだ)は倒れる，だがその時魂が同意したのだ．
倦み果てて故意になすこの二度目の顛倒からお救い下さい．

第 八 留

今は最後，山に登る前に，

イエスは手を上げ，つき従う群衆，

腕に子を涙にむせぶ不憫な女たちをふり返る．

だがわれらはただ眺めるのではない，イエスに聞くのだ，彼はそこに在すのだから．

それはこの貧しい挿絵[8]の真中で手を上げている人ではない．

それは神，われらの救いのためにただ絵の中で苦しみはしなかった神だ．

だからまことにも，この人は全能の神であった！

ある日のこと，神はまさにわれらのためにこの苦しみを忍ばれた．

それでは，これほどのあたいでわれらを贖ったその危険とはいかなるものか．

人間の救いとは，それを成就するために，

おん子が父なる神のふところを余儀なく離れる，そんな単純なわざであろうか．

天国がこのようならば，地獄はいかであろう．

生木ですらかくならば，枯木[9]はいかになろうか．

第 九 留

「またもや倒れた，今度，これが最後．

どうしようもない私だが，立ち上りたい．

木の実のように押しつぶされて，背に負っている人間は余りに重いのだ．

私は悪いことをした，それで私と共にいる死人は余りにも重い．

だから死のう，立っているより腹ばう方がやさしいから．

生きることは死ぬことより，十字架上にあることはその下にあるよりもむつかしい．」

絶望という三度目の罪からお救い下さい．

飲むべき死が残っている限りまだ何も失われてはいない.
私はこの木を終えはしたがまだ鉄[10]が残されている.
イエスは三度目に倒れるがそれはカルワリオの頂である.

第 十 留

ここ天上の小麦[11]の突き砕かれる麦打場.
神なるおん父は覆われず，幕屋の帳(とばり)は引きちぎられている[12].
手は神に支えられ，肉の肉はわななく.
宇宙はその根源において傷つき，底の底までおののいている.
上着と縫目なしの長着が剝ぎとられたので,
われらは目を上げ，敢えてけがれなきイエスを見つめる.
彼らはあなたに何一つ残しませんでした主よ，すべてを取り上げたのです,
今，修道士に頭巾を，奉献された処女(おとめ)にヴエールを剝ぎ取るかのように,
肉にひた付いた着衣のすべてを.
すべては取り上げられた，身を隠すためにもはや何も残されていない.
もうどんな身の守りもない，虫けら[13]のように裸である.
人みなに引き渡され，さらされている.
何だと，あれがお前たちのイエス！もの笑いだ．傷と汚れだらけか.
気ちがい病院か警察行きだぞ.
「巨大な牡牛が私をとりまいている．神よ，犬の口から解き放ちたまえ」[14]
彼はキリストではない，人の子ではない．神ではない.
その福音は偽り，その父は天にいない.
狂人だ，いかさま師だ，話せ，黙れ！
アンナの下僕(しもべ)は平手打を喰わせ，ルナンは裏切りの吻(くちづ)け[15]をする.
彼らはすべてを奪った．しかし深紅の血が残っている.
彼らはすべてを奪った．しかし引き裂けた傷が残っている.
神は隠された．しかし苦しみの人が残っている.
神は隠された．悲しみのわが兄弟が残っている.

主よ，あなたの遜りによって，あなたの辱めによって，
敗北者，強いものに打ち負かされる弱者を憐んで下さい．
最後の着衣があなたから剝ぎ取られるその恐怖によって，
心裂かれる人々みなを憐んで下さい．
医者に励まされて三度目に手術する子
包帯をとりかえるあの痛々しい負傷者，
辱めをうけた夫，死にゆく母に寄り添う息子，
互いに引きちぎらねばならぬあの凄じい愛を憐んで下さい．

第十一留

ここに神はもうわれらと共にない，神は大地に倒れている．
一群の猟犬が獲物の鹿のようにその喉元を捉えた．
そこであなたはおいでになった！ 主よ， あなたはまことにわれらと共にある．
人はあなたの上に坐り，み胸に膝をつく．
死刑執行人が，よじるその手は全能の右手である．
神なる小羊を足かけて縛りあげ，この遍在者をくくりつける．
十字架の上にその背丈と腕巾を石灰で印す．
やがて彼がわれらの釘の痛みを味わえば，われらはそのみ顔に出遇う．
永遠の神のみ子，その限界はあなたにしかない無限性，
それがここではわれらと共に，渇望されたこの狭い場所．
ここに長く臥す死出のエリアがある．
ここにダビドの王冠，サロモン[16]の栄光がある．
ここにあなたと分つ強く堅いわれらの愛の床がある[17]．
われらの尺度に合わすことは神にとってむつかしい．
引張られて，半ば外れた体は軋り，鳴る．
圧搾機のように緊めつけられ，むごたらしく方形にされる．
かつての予言者のことばが証(あか)されるためである，

「彼らは私の手足を貫き，私の骨をことごとく数えた」[18].
主よ，あなたは捉えられてもう逃げることもおできにならない.
あなたはそのみ手足を十字架に釘づけられておられる.
私には異教者や愚か者と連れて天に求めるもう何もない.
四本の釘で支えられたこの神で足りる.

第十二留

ついさき，まさに迫害を受けていたキリスト，今や死に近づく.
大いなる十字架が闇の中で，息づく神にかすかに揺れる.
すべてはととのった．二重の本性[19]の結合から尽きることなく，
肉体と魂の根源から，そして三位一体の一位から，
彼に苦痛となるあらゆる可能性を
しぼり出し，引き出す道具ともはやされるばかりだ.
エデンの園に孤独であったアダム[20]のようにキリストはただひとり，
三時間の孤独に苦しみの酒を味う，
どうしようもない人間の無知を神の隠れ家で味う.
われらの客(まろうど)[21]なる主は生気を失い，み頭(かしら)は次第に傾く.
もはやみ母は見えず，天のおん父には見棄てられる.
毒殺の盃と死をしずかに味う.
でははこのにがい，水の混った酒[22]もお厭ではないのですか，
突然，頭を上げて「渇く」と叫ばれるには，
主よ渇かれるのですか，声をかけられるのは私(わたくし)にですか.
なおも必要となさるのは私でしょうか，私の罪でしょうか.
すべてが成就する前に足らぬもの，それは私でしょうか.

第十三留

ここにキリストの受難は終り，彼と分つわれらの受難が続く.

キリストはもはや十字架上になく，彼を受けとったマリアと共にある，

彼女は約束されたキリストを受け入れたように，成し就げられた彼を受けとる．

衆目の前で苦しんだキリストは再びみ母の腕に隠される．

教会はその諸腕に，とこしえに最愛のおん者をひきとる．

これは神のもの，み母のもの，そして人間の犯したもの，

そのすべてはとこしえにマリアのマントの下に．

彼女はキリストを腕にとり，眼のあたりに見，手を触れ，祈り，涙し，讃美する．

彼女は聖骸布，香油，そして墓地，没薬，

また祭司，祭壇，祭器，聖餐の場．

ここに十字架は終り，聖櫃が始る[23]．

第十四留

苦難の後に死んだキリストの置かれる墓，

さし貫かれたおん者が甦り，天のみ父に昇る前に，

その夜(よ)そこに眠るため急ぎ開かれた洞(ほこら)．

それはただ新らしい墓ではない，私の肉，

それは人間，大地よりもさらに深いあなたのこの創造物．

そのみ胸の開かれた今，そのみ手の貫かれた今，

もはや体に合わぬ十字架はわれらと共になく，

もはやおん傷に応えぬ罪もわれらのうちにない．

さらば世の救い主よ，かくれたもう祭壇からわれらのもとにおいで下さい．

ああ主よ，あなたの創造物は何と開かれたもの，何と奥深いものでしょうか！

注

1）裁判官ピラトは自分がキリストの罪について責任のないことを証すため手を洗う．

2）「おん身は十字架の木において人類の救いを成し就げたもうた．それは死が始った処から再び生命が甦り，木（エデンの）に勝ったもの（悪魔）が木（十字架の）によって敗られるためであった」（ミサ典文より）

3）神と十字架と罪との関係．十字架は贖罪の象徴である．罪が神を十字架にかけ，かかり得たのは人間となった神，キリストであって，ここに罪を負う人間と神との一致，即ち贖罪（アトーンメント）（一となること）が果された．

4）ミサ中，パンは秘蹟によって，その形質をとどめながらキリストの実体に変化する．この聖体（パン）を信徒は拝受する．
「汝をマンナ（天のパン）で養い，豊かな地を与えたのに，汝は救い主に十字架を返した」（聖金曜日典文より）

5）ヘブライ人は最初の子を初子（ういご）と呼び，それには法律上の規定があった．「マリアは……初子を生んだので……」（ルカ２の７）

6）聖母マリアは救いの完全な協力者であり，教会であるキリストの神秘体の霊的母であって，われらの母なる教会の象徴ともされる．

7）ぶどう畑はイスラエル，刈入れ人はキリスト，酩酊の日はキリストが自らの血に酔う受難の日である（イザヤ書参照）．

8）一般に十字架の道の祈りにその場面を表わす絵が伴う．

9）生木とは罪なきイエス，枯木は罪ある人間（ルカ23の31）．また天国はキリスト．

10）鉄は十字架に釘づける鉄釘．

11）「ああじゅうりんされた麦打場のように，打ち砕かれたわが民」（イザヤ21の10）天上の小麦はキリスト．

12）「いま私の（神の）幕屋はこわされ，綱は切られた……」（エレミア10の20）．

13, 14, 18）ダビドの詩篇22．これはキリストの受難の出来事が記されていると，福音史家によって見られている．

15）Joseph-Ernest Renan（1823—1892）．特にその著「イエス伝」によるもの．ルナンは回心前のークロデルに大きな影響を与えていた．

16）神と人類との神秘的婚姻を表わす．
「一本の十字架，ただそれ丈かと仰言るのですか？私達が神と共に分ち合うものは，その十字架をおいて他に何もないのです」（「繻子の靴」，ドナ・プルエーズのセリフよ

り).

17) エリア，ダビド，サロモンなど予言者はすべてキリストの前表.

19) 神性と人性の二重の本性. また神性は父と子と聖霊の三位一体で，キリストは子としてのペルソナをもつ.

20) キリストは第二のアダムとも呼ばれ，第一のアダムと深い関係にある.

21) キリストはわれわれの魂の客とも言われる（ヨハネ黙示録3の20).

22) ミサの奉献の部分で，カリスにぶどう酒と水を入れ，「この水とぶどう酒との神秘によってわれらの人性を受けてその一人となられたおん者の神性にわれらをも与らせたまわんことを」と祈る. 水は人性と共に，キリストの犠牲に参加する信徒の犠牲をも表わす.「あなたのよいぶどう酒は水で割られた」（イザヤ1の22).

23) われらと共に地上に留るキリストの聖体の置かれる櫃. 聖堂には50センチ立方体位の箱形のものがあり，昇天後のキリストは，地上においては，この聖櫃と，信者の心と体を住家とする.

解　　説

これは，クローデルがランボーの作品に接して魂（アニマ）の受胎を深く経験し，生への歓喜に目覚めた後，その年のクリスマスの夜，パリ・ノートルダム聖堂で，突如神の恩寵の手に触れられて，感動的回心をした1886年，彼18才の年から15年程を経た作品である. その間に彼は，19世紀合理主義的機械論からの脱出，マラルメの詩精神（アニムス）の衝撃，休みを与えぬ魂の客である神を迎えて自らの「宇宙への情熱」との葛藤，一度は，一切を捨てて超自然界への没入を試み（修道者志願)，彼自らの「真昼に分つ」の経験（恋愛事件）によって悪と他者の存在に目覚めてもいる.

作品としては，「交換」(1893—1894)，「人質」(1909—1910)，「マリアへのお告げ「(1910—1911）と＜犠牲＞をテーマとしたものを次第に重ねてきているが，この詩「十字架の道」の想は，1910年初頭から1年余にわたって練られていることが，日記，*Cahier I, II* から知られる. それを拾ってみると，

〔*Cahier I*〕 1910年1月14日—2月9日

＜十字架はあらゆる意味で人間を超える＞という象徴的な言葉で始まっている.

2月9日—3月6日

第十留について，＜包帯をはがされる負傷者，下着を変えられるいたいけな高熱の子のための祈り．愛によって傷ついた者みなのうちに，剝ぎとられたわが主を思うこと＞

3月6日—27日

＜われわれキリスト者は，十字架がわれらと共に倒れるのでなければ，決して倒れはしない＞

＜われわれは，イエスの面影をそのおん血とわれらの唾気によりもっている＞（六留）

＜十字架の前のマリアの苦しみを理解するには，手術台の上に幼い娘を置かれた母を＞（十一留のためであったが，四留に表現される）

＜十字架の道，そこに人はわれらの主を見ないであろう＞

＜セザルと共に人間が神となる瞬間に，神は人間となる＞（一留）

4月5日—17日

＜われらの罪のねじ込みと圧縮でしぼり上げられて，目，耳，鼻，毛孔のすべてから血を失ったキリスト＞

＜ヴェロニカ．ホスチアのように大切に保持された，われらの唾気でつくられたキリストの面影＞（六留）

4月17日—24日

＜キリストの十字架の何ものもが失われないように．シレネ人はだれに助けるよう強いられているのかを知らなかった．この瞬間にも，われらが荷うのは真の十字架の端ではないかどうかを，だれが知ろう？＞（五留）

4月24日—5月7日

＜死を宣告されたイエス．生命そのもの，天においても地においても，すべての生命の原理．われらと共にある彼の存在はもはや耐えがたい＞（一留）

6月3日

＜十字架とは，三位一体から第二位を引き離す鉤のようなもの＞

〔*Cahier II*〕 6月6日—29日

＜主よ，十字架が必要ならば，ここに私がおります．いと惨めなものである私は，いつでも一片の木に価いします＞

＜三度目の顚倒で，あなたが仰向けになって，天に向って顔を上げられる時，そのおん腕に重荷を負わせるのは私です＞（九留）

8月15日—9月10＜三度目の顚倒で，完全に傷つけられ，たたきのめされ，無茶苦茶にされたキリスト＞（九留）

＜第十三留—各人には受難を忍ばせる個有のキリストが与えられている．審判の日に，聖母はおん子を膝にとって，われらが彼にしたことを眺める＞

＜第一留—罪がないのは抵抗する裁判宮である＞

9月10日—18日

＜群衆は叫ぶ，そしてその向うに，手を洗う判事が見える＞（一留）

11月28日—12月23日

＜心に悪をなすのに二様ある＞

1911年1月1日—8日

＜いつか十字架上で，われらはあの苦い酒を味う＞（十二留）

3月31日—聖木曜日（4月13日）

＜第二留—キリストによる十字架の厳かな受納．あの聖体拝受「私のパンの代りに木を与える」．悪，破壊されず，聖化する十字架．今神はそこに繋がれている．解き明さず，成し就げにこられた＞

＜第五留—十字架の何ものも失われないように＞

＜十字架が，われらを荷う前に，十字架を荷わねばならない＞

＜第十留．離脱，完全な裸，聖体の裸，愛における自己消滅，愛以外の一切のものの消滅．もはや見るべきさまは何もない＞

完成は1911年4月15日聖土曜日．ニューヨーク，ボストン，中国を経てプラハ駐在の時である．初版は，5月．ブリュッセルの Durendal 社から38頁程度の小冊子で，100部非売印刷され，友人に送られた模様（当時交際のあったジイドも8月13日に受けとったことが手紙に残っている）である．その後パリの Art catholique 社から三版まで，1915年には N. R. F 社から，「聖会歴」の第五部として出版，以後様々な形で重版され，1956年までに12版，また1965年にも，Art catholique 社から（Jean marchand の木版画挿入）の小型本があるので，今に到る迄文学作品としてと同時に祈りの糧としても広く親まれて

きたのだと思われる．

この「十字架の道」の形式は，カトリック教会で行われきた一種の信心形式を借りたものである．即ち，聖地エルサレムへの巡礼者達が，キリストの受難の道（カルワリオ山からピラト総督邸＜アントニオ城＞までの聖書にみられる種々の場面)を，主の苦しみを偲びつつ辿ったことに始まるようで，留(statio)についての最古の記録は，L'estat de la Citéz de Jherusalem（エルザレエ市話）(1187）と言われるが，14，5世紀にも，キリストの墓で徹夜した後，聖なる道（Via sacra）を，ピラトの城に向って行った（当時は順序が逆）ことが知られている．次第に伝説的部分（三，六，七，九留など）も加わって16世紀始めに全七留であったといわれるものが現在の形に発展した．14世紀頃からフランシスコ会を中心に，聖地以外でも行われるようになり，現在では各聖堂内に全十四留の場面を画いた絵画や彫刻があって，殊に復活祭前にあたる四旬節中の金曜日には共同でこの祈りが行われたりもする．従って十字架の道の形式をとった作品，殊に美術作品は多い．

こうした形式的制約もあってか，クローデルにとって精神が信仰の中で働く時，ミューズが恩寵と共に働くべきミューズの働き，なかでも彼の抒情的な高まりは，余り見られないように思われる．しかし彼の作品の鍵ともいわれる「詩法」(1903—1904）が解き明しているその宇宙観，時間・空間の原理はここにも確かに生きているようである．ことに十，十一，十二，十四留などに見られるように，宇宙的ひろがりの中で，そして精神，物質を含めた一切の連帯性(ソリダリテ)の中で，この受難のドラマは把握されている．＜存在することは創造すること．森羅万象は時間の中で傾聴し，協議し，構成する＞，＜われわれは単独では生れない．naître それはすべてのものにとって Co-naître することである＞，＜持続の中にあるすべての事物は，その補足条件が，周囲に前もって設定されていることよって必要なものであり，自らの存在理由をそれ自体の外に見出すが，かつこの存在理由は，その事物を生み出すことによって完成される．この万物にとって部分であることの必要，これを Connaissance（共生＝認識）とよぶ＞のだという．つまり，魂というものは，創造の行為の衝動のもとに生れ，万物と共に生れつづけ，認識しつづけてゆくもので，その働きにお

ける顫動的リズムが人格をあらわす，そしてこの魂のリズムこそが＜本質的な詩句＞なのである．

＜認識の本質的な器官は，意識の二つの拍子であり，これら拍子の現世における表象は呼吸，心臓の鼓動，高音と低音，短音節と長音節，あらゆる言語の基礎となる短長格（イアンブ）＞だといっている．「十字架の道」の詩句も，＜韻も律もない詩句＞であり，一見日常会話風でありながら，呼吸と認識に結びついた生命そのもの（永遠においても存在そのもの）の律動を帯びているのだ．中でも彼が聖書から自然に学んだであろう拍子の基礎としての対句法は，日本語に移しても明確である．

さらに，原因とは，あらゆる事物を連続の中に挿入したいため，発見しようとつとめる繋ぎ目（jointure）であり，或る与件がそれなしでは存在し得ないような生産的エネルギーを伴うという．それはアリストテレスの四原因などとは関わりなく，単に実体に即して物質と手段に直面することである．すなわち＜主体を変化させるもの，主体を強制し，決定するものは手段の干渉であり，はっきり発音される命令のように明確な，自己の fiat（なれかし），すなわち形成の外部的もしくは潜在的働きかけである＞という．ここに第五留におけるつなぎ目としての十字架の姿が現われる．十字架はこの世における諸原因と同一の次元にないとはいえ，＜自己に本質的に欠けた＞原因であり，それなしには宇宙全体が＜前進しえない＞，存在しえないエネルギーを含んでいる．十字架，即キリストの死は，第二の創造，救いにおけるつなぎ目であり，自然と超自然の生命のつなぎ目でもある．クローデルは，＜わたしの富は無尽蔵だ．宇宙全体が欠けていること，そして宇宙に私自身が欠けていること，それは宇宙全体を所有すること＞だと高らかに叫んでいるが，こうして宇宙におけるつなぎ目に詩人としての彼自らがなることを欲しながら，他方，キリスト者として，十字架における主との愛の一致を通して，永遠の救い，恩寵のつなぎ目，そして創造者と被造物とのつなぎ目になろうとしたことが，終極の第十四留にもうかがえる．

この作品後も，殊に「堅いパン」（1913 — 1914），「辱められた父」（1915—1916），又彼の詩劇の集大成ともみられる「繻子の靴」（1921—1924）に十字架

と犠牲のテーマは繰返し展開され，散文「詩人が十字架を見つめる」(1933—1935) も生れている．こうして彼にとって，悪と罪，十字架と恩寵の問題は，終生のテーマであったといえよう．その意味でこの小品にはエッセンスの趣きがあるが，又これと同時代の作品全般が，彼の作品の二面のうち平和，勝利の側の観点に立っていると，彼自身語っている (J·Amrouche に) 通りでもある．

この詩の印象について，彼の親友 Frizeau は，1911年8月5日ボルドーから次のように書き送っている．「峻厳なグリューネワルトの絵画と同じく，あなたの「十字架の道」の詩も胸を刺すようです．そこにはあなたの素早く，簡潔な，切迫した言葉使いが認められます．私には十字架と救い主にじっと注がれたあなたの眼が見えます．私もあなたのお側で感動しています．なぜなら，そこにはどんな文学的幻想もなく，現実そのもの，われわれを捉える心と行動の現実を表わしているからです」と．

最後に，直接的には第二留，第十四留でクローデルが歌っている十字架上の神と人間，罪と救いの交換について，第一次大戦後東方教会の修道士となった名もなき一人の観想者の心に語られたキリストの言葉を味わいつつ，クローデルの祈りの深さを偲びたい．「『私はお前の義である』人は誰でも私からこの言葉を聞くことは正しい．そして義人である私に向って「私はあなたの罪です」と言うことも正しい．……私は全人類の罪が当然受くべき遺棄の重荷を自ら担った．救われた者と，私が十字架上で彼らのためにかち得た義との間に，絆があるように，痛悔しない罪人と私の間にも絆がある．……わが子よ，お前にはまだ「私はお前の罪を負った」という言葉の意味が分っていない．……十字架上で私はお前の身代りとなった．私は物事の結び目である．私だけがそれを解くことができる．それは，及ぼされた害とその原因を私が身に負ったからであり，私の中に贖いと赦しとが宿っているからである」

クローデルも，1911年の聖週間，キリストの受難への思いを，教会全体の荘厳な典礼，黙想とともに，高めつつ，キリストの亡骸が墓に葬られた悲哀と，十字架の悲惨を終えた静けさとの中で，しらじらと明けゆくあの聖土曜日の朝，やがて始まる復活への言いしれぬ希望に向い，この闇から光への荘大な回転のドラマに対する平和な，しかしめくるめく思いに満ちて，この詩を祈り歌い終えたのだと思われる．(1971. 4. 29)　　(F. 30)